

## 令和4年度 教育課程特例校実施状況（自己評価・学校関係者評価）

### 1. 教育課程特別校としての取り組み

本校では様々なバックグラウンドを持った生徒たちを受け入れており、多数の帰国子女や英語が堪能な生徒が在学している。中学高校の6年間を通して、彼らに数学・理科・社会の3教科を英語で教えるイマージョン教育を行うことで英語力のさらなる進捗を図り、多様な教育を実践していくために特別な教育課程を編成している。

### 2. 学校評価(自己評価並びに学校関係者評価)

	自己評価		学校関係者評価	
	評価	現状・課題・反省	総合評価	意見・要望
指導体制	A	本校には31名の外国人教員がフルタイムで勤務しており、日本人教員と同様に教育活動に取り組んでいる。本校のイマージョン教育においては、外国人教員が同じ教科の教員と連携しながら指導案や試験などの作成を行っており、質の高いイマージョン教育が実施できていると考える。各教科には日本人だけでなく、外国人の教科主任も設置しており、それぞれがリーダーシップを発揮して、本校独自の教育を実践している。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学園が生徒の多様性を重要視し、様々なバックグラウンドを持つ生徒の受け入れ態勢をしっかりと整えてくれていることに感謝している。</li> <li>・令和3年度まで中学インターナショナルクラスにおいては、数学、理科、社会の3科目においては授業を英語と日本語のどちらかで受けることができたが、令和4年度よりその制度がなくなったため、言語選択制を戻してほしい。</li> <li>・コロナ禍において、本校の特長である「相互通行型」の授業がなかなか実践できていなかったが、コロナの感染状況が落ち着き、グループ活動などの対話的学びが実践できるようになったことは非常にポジティブである。</li> <li>・イマージョン教育の一環として行っているバディ制度や放課後の言語活動などが生徒の英語習得のモチベーションになっていると感じている。</li> <li>・中学1年生の英語劇の発表は、質も高く、丁寧に準備をしていたことが伺えた。</li> <li>・三者面談において、日本人教員と外国人教員が同席してくれるため、イマージョンの授業の様子などが聞けて良かった。</li> <li>・帰国子女の生徒は往々にして日本の学校生活に戸惑いを覚え、適応が難しい場合もあるが、本校では学校全体に“international”な空気が漂っており、自分らしく学校生活を送れている。</li> <li>・進路指導に関しても、国内大学だけでなく、海外大学を視野に入れたグローバルな進路指導を展開してくれているので、将来の可能性がより大きく開けている。</li> </ul>
授業内容	A	授業内容に関しては、学習指導要領をベースにしながら外国の教科書なども使用し、ローカルとグローバル両方の視野を持てるように指導をしている。例えば、歴史の授業などでは、ある歴史的事項について日本の教科書に書いてある内容とアメリカの教科書に書いてある内容を比較検討して、多角的に物事を捉える力や論理的・批判的な思考力を涵養するように心がけている。 主要教科を英語で行うことによって英語力の伸長だけではなく、グローバルな思考を養うことが可能になり、大変意義深いと考えている。		
生徒への対応	A	HRにおいては、外国人教員と日本人教員がペアになって担任業務を行っており、生徒それぞれの個性やバックグラウンドに配慮しながらHR運営を行っている。 授業においては、生徒主体のインタラクティブな授業設計を心がけており、生徒自身が自己を表現できる機会を多く与えている。		
情報提供	B	パンフレットや学校説明会等において学内外に本校のイマージョン教育の実践状況を共有している。 保護者には三者面談等を通して授業の内容や方針などを説明している。 授業の評価方法などは学園HPにおいて各授業のシラバスとともに示している。		
効果	A	定期試験や課題などの評価材料に加えて、PSATやTOEFL ITPなどの外部試験を活用しながら生徒の学力の進捗を測っている。多くの生徒に英語力の向上だけでなく、思考力やコミュニケーション能力などのアカデミックスキルの向上が見て取れる。		
その他		2021年度より高校International Course Advancedにおいては、西オーストラリア州の教育プログラム(WACE)を導入し、本校の科目とWACEの科目の両方を履修することで日本とオーストラリア2か国の卒業取得が取得できるDual Diploma Programを実施している。		

評価点

A：評価できる B：やや評価できる C：やや評価できない D：評価できない